

澤柳政太郎における「真」の教育
- その教育思想と教育実践を通して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
赤星 信太郎

教育は、時代の要請によってその姿を変えてきた。明治時代には国民皆学を目指した画一的な教育が求められた一方で、大正時代には新教育運動の波が押し寄せ、自由教育の風潮が世の中を席卷した。昭和に入ると、教育によって国民統制を図るなどの帝国主義的教育がなされたが、第二次世界大戦後には「教育基本法」や「学校教育法」が制定されるなど、GHQによって教育の自由主義化が実施された。そして現在、日本の教育はいっその混迷を深めている。いじめや不登校が深刻化し、急激な教育制度改革が進行している中で、私たちは今一度、本当の教育とは何かを見つめるべきではないだろうか。

本研究は、日本の近代教育において「児童中心の教育」を謳った大正自由教育に注目し、その中でも中心的役割を担った澤柳政太郎の教育思想と教育実践から、もう一度、教育の本質を問い直そうとする試みである。

第一章では、澤柳政太郎の生い立ちを辿り、その思想形成に至る過程をみた。澤柳は文部省の官僚をはじめ数々の学校長を歴任し、晩年には自らの思想を実践するために、成城小学校を創設した。数多く存在する大正自由教育者の中でも、澤柳は日本の教育制度改革の実践者という稀有な存在であった。また本章では、澤柳を取り巻く大正自由教育を代表する教育者たちの著述を通して、澤柳の人物像を探ってみた。

第二章では、澤柳の教育思想を考察した。彼の思想を「教師論」と「生徒論」の二つに分け、教育者と被教育者の心構えを澤柳の視点から読み解いた。「教師論」では「教育者皆ペスタロッチたるを得へし」という澤柳の信念にふれ、教師の大いなる教育者精神の発奮が期待されたことを論じた。また「生徒論」では、児童生徒が「自発的奮励」によって自己の修養に努めることの必要性について論じた。

第三章では、澤柳の教育実践を取りあげた。成城小学校で行われた「児童中心の教育」の実践内容を中心に、澤柳の教育実践を考察した。澤柳は、教師に「教育を科学的・研究的に見ること」と「児童中心の教育を実践する姿勢」を求め、また自らもその実践に励んだ。その実践方法の代表的な例として、澤柳はアメリカでパーカー・スト女史から「ダルトン・プラン(ドルトン・プラン)」を学び、日本に紹介した。

以上をふまえて終章では、大正自由教育の「父親的存在」である澤柳の今日的意義を論じ、これからの教師に求められるものを考察した。そして、澤柳のいう「真の教育」が子ども一人ひとりを大切に、教師自身が教育を科学的・研究的に見る姿勢を持つことの重要性を示しているということ結論とした。